研究

塩見園の二基の宝塔

――その造立に至る縁起の考察――

会員　軸　丸　勇

後醍醐天皇は、宮方の勢力を盛り返すべく、幾人もの皇子を各地に御派遣になった。

延元元年（一三三六）から、恒良親王・尊良親王の御二方を北陸方面に、宗良親王を伊勢に、義良親王を奥州へ御派遣になった。そして延元三年の秋、天皇は最年少の懐良（なが）親王を、九州に派遣なさることとなった。

征西将軍宮といっても、御年僅か十二歳の少年であったので、勘解次官五條頼元を補佐役として、吉野の行宮（あんぐう）を発（たち）たせられたのであった。

延元四年六月、懐良親王は紀伊から讃岐に渡り、九州へ向かう計画であったが、周囲の情勢がそれを拒み、ひとまず讃岐におちつかれた。

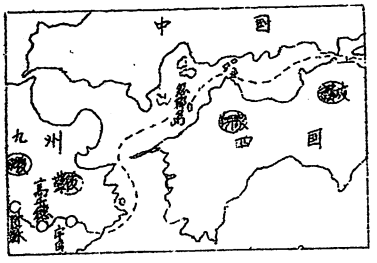
天皇は、懐良親王を九州に派遣なさるに先立って、九州の宮方である阿蘇惟時に対して、懐良親王に随って忠節を尽すようにという綸旨を送られた。

親王一行が、紀伊から讃岐へ、さらに九州へ御渡海の道案内さ、天皇は惟時に依頼なさったのであるが、惟時は先の元弘の乱に一族を率いて京に上り、また建武二年の足利尊氏の謀反の際には、菊池武重と共に箱根竹の下の戦闘で目ざましい働きをしたので、薩摩の瀬家院・伊集院の守護職に任ぜられた。しかし大国島津に周囲をかこまれており、思うようにならず、且つまた多々良浜の合戦（建武二年）で、惟直・惟成の二人の子供を宮方のために戦死させており、おまけに郷後に帰って見ると阿蘇大宮司職は、足利尊氏から一族である阿蘇弥能に与えられており、不満やる方ない時であった。そのようなことがからみ、惟時は一向に宮方のために腰をあげようとしなかった。

こんないきさつで、征西将軍宮も止むなく伊予の土居氏、得能氏を頼り、更に瀬戸内の水軍の一人忽那氏のもとに身を寄せられて、しばらくの間、九州下向の機会を待たれていた。

ようやくにして興国二年（一三四一）になって、親王は忽那島を発たれた。

この間、延元四年（一三三九）八月、後醍醐天皇は吉野の行宮（あんぐう）で御崩御になり、後村上天皇が御即位になった。その訃報があったのは、親王がまだ瀬戸の小島で、情勢の好転を待って居られた時であった。



懐良親王は、興国二年春、瀬戸の忽那島を発たれたが、その際、今塩見園一円に住む岡田氏一族の遠い先祖たちも、親王の九州下向にお供したものと思われる。岡田氏はもと讃岐国寒川郡岡田村（現在の香川県寒川町）の出である。親王のご一行は翌三年五月、薩摩の谷山隆信に迎えられて谷山城にはいられた。

その頃九州には、足利尊氏の武家目付役として一色氏、外に仁木氏・小貳氏・大友氏と大物が控えており、宮方としては、僅かに菊池氏・阿蘇

氏・八代の名和氏だけが働いていた。並々ならぬ情勢の下にあった。

親王は延元三年（一三三八）の秋吉野を出られ、四年六月四国に渡り、興国二年春瀬戸の忽那島を発たれ、三年五月薩摩の谷山城に入られたのであった。

この間一年余りの空白の期間がある。しかし当時の船でも、四国から薩摩の谷山までは、一か月もあれば充分行けたと思う。

まず第一に思うことは、後村上天皇の綸旨と懐良親王の令旨が、あの山深い高千穂に、何故に、そしてどの様な径路、道すじで届けられたものであろうか。

後村上天皇の綸旨は、興国二年四月二十二日付で、

「日向国高千穂の三田井入道明覚の跡地は、相違なく芝原又三郎入道性虎に与えるので安堵せよ。」

となっており、また懐良親王の令旨は、興国二年五月八日付で、

「近日中に親王方に馳せ参じ軍忠を致すに於ては、三田井入道の跡地は、そのまま与えるであろう。征西将軍宮の仰せをうけて斯の通りである。」

との旨を勘解由次官から、芝原又三郎入道館へ遣わされている。（何れも阿蘇文書訳文）

この文書が出されたのは、宇目の里ではなかったか。宇目と高千穂は山続きであり、足利方の大友氏（豊後）と延岡土持氏（日向）の国境に近いが、殆んど人馬の往来もなく、また北浦海域には瀬戸の水軍河野一族の村嶋があり、征西将軍宮ご一行の上陸を、一層可能にしたはずである。北浦―北川―宇目―高千穂―阿蘇―菊池の道は、懐良親王九州入りの最高のコースではなかったか。

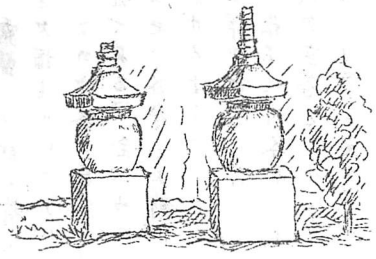
征西将軍宮ご一行の最終目的地は、薩摩の谷山ではなはなく、菊池か、阿蘇であったはずである。菊池武重や阿蘇惟時が京都から帰国後も、朝廷から二人に対し、度々召命が下されていることからも察せられる。

さて、宮のご一行が宇目の里に仮宮を造り、高千穂から阿蘇へ志されたのであるが、菊池氏は周囲を足利方に囲まれており、また阿蘇氏は二人の息子の戦死と、大宮司職を足利方に取り上げられたなどの事情から、宮方に対する態度を硬化させていた時期であった。

その後、惟時は興国四年には遂に足利方に味方しているが、五年後の正平三年にはまた宮方に帰順して、懐良親王の菊池入りを迎えている。

こういう情勢の中で、宇目から目前の高千穂に向け行動を起すこともならず、令旨のみ高千穂の地に届けられたものと思う。宇目から山伝いに行けば、高千穂までは約四十㌔である。

しかし高千穂行きもならず、止むなく一行の中の岡田氏一族を宇目の地に留め、宮方の一つの拠点としたものと思われる。



（宇目町歴史民俗資料館の宝塔）

宮のご一行が出発された後、宇目の一角を守る岡田氏一族は、周囲を北朝方に囲まれており、並々ならぬ苦労がつづいたことであろう。

貞和元年、足利尊氏は全国六十六か国の国ごとに、安国寺と利生塔を建てることを定め、北朝に奏請して正式に寺塔名を決定し、元弘以来の戦没者の霊をなぐさめる

趣旨で、その建立を始めた。

このように南北朝時代を背景に、宇目郷に住みついた岡田一族によって、二基の宝塔が造立された。その内の一基は利生塔として北朝年号を刻み、別の一基は宮方のために建立された。

貞和五年は、後醍醐天皇が吉野の行宮で崩御されて十年目、天皇のご冥福をお祈りすると共に、南朝方のために造立されたものと思う。

また塩見園を中心に一キロ位の所に宮野・宮園・宮が瀬などの地名もあり、懐良親王の仮宮もこの付近にあったものと推定する。

（参考図書）日本の歴史・南北朝史論・大分県郷土史料集成・高千穂太平記

〔付記〕

塩見園の宝塔について

宇目町塩見園の一角に、均衡のよくとれた美しい二基の宝塔がある。（前記利生塔、前ページスケッチ風の塔）刻銘には、

「貞和五年己丑十月二十八日」

と北朝の年号が刻まれている。

材質は凝灰岩で、地上から相輪中部（相輪上部と宝珠は欠損）まで二・五㍍位。方形の基壇の上に基礎を建て、その基礎の四面には、見事な格狭間が彫られている。格狭間の曲線は左右に強く張り出しており、肩のあたりからの曲線は、ゆるくふくらみを持ち、おおらかなかにも、上部の重さをささえる力強さが表われている。

塔身は高さ五十三㌢、径六十一㌢、雄大で安定感がある。笠石の軒の厚さ、反りや、軒両端の線など、時代をよく反映している。

露盤・伏鉢・請花は特に良い。しかし相輪中部から上を欠損しているのがおしい。二基ともである。

この宝塔の見どころは、基壇上部四面に彫られた反り花である。全体的に彫りは深く、各蓮弁の形に九味をもたせ、各弁を両側から押し上げるように囲んで中央に引上げるように、よくまとめている。彫り方もていねいで、上部の重さに対して、よくバランスがとれている。

私は九州各県、あちこち随分と見学しているが、同年代の宝塔としては、この宝塔の右に出る塔はない。貴重な、見事な宝塔で、石造重要文化財である。

これだけ見てもわかるように、地方作の感じが全くない。きっと京都か鎌倉あたりから派遣された、名ある石工によって刻まれたものであると思う。

（おわり）

紹介「簸窯」のけむり

（羽柴）

―牛痔川のほとり元田に誕生した陶芸について―

毛利高政による波越焼、上久部の皿山、宇目町水ヶ谷の「水ヶ谷焼」の外、ついぞ見聞することのなかった佐伯地方に、あたかも明星の輝くように陶器を焼く新しい窯場が築かれた。それは弥生町元田の青年陶芸家、市野瀬俊郎氏の経営で、名付けて「簸窯」という由。

市野瀬氏は本会市野瀬会員のご長男、佐賀県に修業し、この道一途に陶芸に没頭している。そして去る正月二日、何度目かの窯を開けた由である。

去る一月八日、私は畑野浦の富高(丈)会員と元田のお宅に伺い、作品を拝見する機会を得た。広い二部屋の陳列には、花瓶や茶碗がきれいに並べられ床の間や余った分は畳の上にまで、数十点が置かれてあった。

均整のよくとれた形・しぶいはだの色合い、手に持ってずっしりと感ずる重み、すでに大したもの出来である。今後のご精進による大成を祈り、郷土の誇るべき陶芸にまで成長してほしい。